

世界の現場から

犬養道子

世界の現場から

犬養道子

中央公論社

世界の現場から

1993年 5 月15日初版印刷

1993年 5 月25日初版発行

著 者 犬 養 道 子

発行者 嶋 中 鵬 二

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋 2-8-7

振替 東京 2-34

Printed in Japan

©1993

ISBN4-12-002217-X

印刷所 三晃印刷

製本所 小泉製本

世界の現場から
目次

まえがき
7

クルド難民キャンプから——トルコ・イラク国境

11

モザンビーク難民の惨

22

重い旅——一九八八年十一月末

29

ヨーロッパに学ぶ——「体験的主権在民」

52

和を求めて——言葉の大旅行

66

アフリカン・シンフォニー

82

モザンビーク再び——援助についての再考察

93

Vacant

113

私の「リゾート」

130

マダムA——識字教育をめぐる

142

一九八九年・水と森

156

コンの時代——松方三郎の助言 167

絶望の子ら 193

アウトサイダー断片 203

一少年の手紙 218

底流の人 227

ブック・フェア「ジャパン」 246

プラハからの三通 255

休みのすすめ 263

百合の泣く土地——旧ユーゴへの旅 271

ボスニアから米大統領への書簡 290

——一九九三年二月二十四日南ボスニアの町にて

世界の現場から

まえがき

現場とは何なのか。かなり大きい辞典字苑でもかたんに、「ことの起っている場所」「いまだの起っているところ」と書いている。事件の文字は、何かしら常ならない出来ごとを指すが、ただの「こと」となると、よろこばしいことや善いことにも十分使われ得る。しかし、現場の一語が登場するとき十のうち八か九まで、常ならずおそろしいあるいは危いあるいは（人間にとつての）悪いことが起っている場所と、人は解釈する。それは正しい。

本書におさめられたエッセイの中心テーマをなすルポは、たしかに、おそろしくむごく危いことどもの現場報告なのである。ありつつなお、極めて不十分な現場報告。なぜなら、現場をほんとうにルポルタージュにまとめ描きたいなら、第一に、現場がどのように、近くの人々いやまさきに現場でまきこまれた人々や駆けつけた人々によって応急処置をほどこされ、どんな調査を経てベストとまでゆかなくとも出来得る限りの処理にもちこまれたかまでを書かなければいけないから。

第二には、現場はどれもこれも、原因あつての上であらわれて来る。突然異変ではないのである。現場の中の多くは、何十年何百年ときには千年もの歴史を背負っている。遠因近因とりまぜての原因すなわち歴史は、屢々、^{しばしば}思いもよらぬ、一見いまの日本人にとって「どうでもよい」ようなものごと出来ごとをも含みこむ。たとえば、本書ちゅうの旧ユーゴ「現場」に出て来るセル

ピア・オーソドックスクリスト教。

その上、すべての現場は、机上抽象論で「考える」限り、とうていよくわからない複雑さを抱きこむ。そこに人間につきものの弱さ愚かさ欲深さなどがまつわりつくとなれば、たったひとつの現場解説も、途方もないおおごととなるのである。本書におさめられる現場のたったひとつをとってみても、それだけで優にまたらくに、数百ページの一冊となる。

筆者は最初、時をかけて、原稿用紙たかだか十枚の、新聞への寄稿文を含め、それぞれ一冊ずつの歴史書としたい望みを持っていた。そうするのが正統と思われたからである。

が、再考の末、この「正統さ」にはデメリットも十分にあると気づいた。すなわち、生ま生ましさの消えること。筆力不足の本書の文ですらも、生ま生ましさは、日本の読者たちに何らかのショックと、これほどにも和から遠いわれわれの時代と世界に対し何をしたらよいかの考察を（幸ならば）与えることが出来るのではないかと。

我田引水の気味の十分にあることを承知の上で、筆者はジョン・スタインベックの第二次大戦ちゅうの従軍記 *Once There Was A War*（初版一九五九年）の第三版（一九七九年）序文に書かれた一文を引いてみたい。スタインベックはじめは「とうの昔のことになってしまった」戦争の現場からしょっちゅう米軍当局検閲にひっかかりつつ急いで書いた十数篇に、手を入れることを考えた。一々のルポは当然極めて断片的局地的であるから。

「けれど、」とどのつまり、元のままの形で第三版を出すことにした、とスタインベックは書いている。手を入れればむろん、より完全にはなろう、しかし、「あ、いま、これを書こう」と夢中でペンをとった現場での、自分自身の感動や恐怖や緊張感は、「なくなってしまうだろう」。事実、手を入れぬ元のままの不完全ルポであったから、スタインベックのこの本は、まれに見る従

軍記となったのである。人間のあわれさ、希求の深さ、雄々しさ、悲しみやよろこびの大きさが、このだれでも分け持つ人間の共通性もろとも、読む者の心にずしんとひびいてのこってゆく。スタインベックとはくらべものにならぬルボと言ひ条、同じことを筆者も考えるようになったのである。クルドキャンプの墓掘りで明ける朝、墓掘りを手伝い共に涙をした直後ノートに走り書いた、舌足らずのルボにはあのときの筆者の、裂かれた心と、掘られた土の匂いが少くも筆者にとってはまつわりついている。そもそもは「旧約聖書」創世記十一章に登場する、長い歴史を負うクルドとは何で、どうして迫害を至るところで受けつづけたか、なぜいまもイラクに追われつづけるのかなどを書くよりは、そのときその場での走り書きのままにのこしたい、と。

先に記した現場ルボの条件の第一については。ガス管の破裂などちがいが、不幸にして処理はいまだしなのである。ひとつの処理めいたものごとがあらわれると見るまに、その処理ゆえの（と言ひ切ることも出来ないが）次の「現場」が出てしまう……予想予見は危い、のである。

新聞へのみじかいルボいくつかと、「文藝春秋」本誌にずいぶん以前に寄せた「コンの時代」をのぞき、のこり全部は岩波書店の「世界」に寄稿したものである。快く中央公論社からの出版にに応じて下さった岩波書店にお礼を申し上げたい。

「コンの時代」や「私の『リゾート』」「休みのすすめ」は、現場ルボとは決して言われまい。が、かくも痛み深い「現場」をかかえるいまの時代の日本人に、どんなメンタリティと、「考えめぐらすおちついた時間」が必要とされるのだろうかを考えた末の一文であるために、敢て含めることにした。

そう、各「現場」の痛苦とニーズを、イデオロギイに囚われることなく、「コンに」分けあっ

て「コンに」背負うことは市井の片すみに生きる者にも十分に出来る。地球号というひとつの舟に身を托す人間にとって、舟のどこに穴が開くかは問題ではない。問題は穴が開いた、ということなのだ。

ある「現場」にとって、和はいまだあまりにも遠い。が、遠いからと言ってわれ関せず焉ではすまされぬ時代をわれわれは生きている。どれほど小さな次元でも和の灯をともしたい——本書をつらぬく筆者の望みは、そこだけにある。

一九九三年三月一日 再度の旧ユーゴへの旅の直後、フランスにて

犬養道子

お志あらば。郵便振替、名古屋四一八八〇七七。犬養基金。現在インドシナ（在日定住）難民青少年八人。他にクロアチア、ボスニア、セルビア青年男女三十四人に奨学金。これら旧ユーゴの場合には（日本はずっと高額）一ヶ月学費、衣食住込一万四千円。学びつつ、寄宿での共同生活を通して和の人材、将来の交流の土台をつくる。

クルド難民キャンプから——トルコ・イラク国境

(トルコ南端ディアルバキルにて 一九九一年四月二十二日早朝)

二十一日午前九時、朱色土の斜面に新しい墓が掘られた。遺体は少年。身ひとつで十七日前雪の山岳地をイラクから二週間かけて共に逃げた両親の、最良の衣服に包まれて、二メートルの深さの地中におろされて行つた。見守る人々の中に泣き声はない。無言の涙と合掌だけ。手伝つて土をかぶせた。

あたり一面は墓である。ついそこにはピンクの枕まくらの置かれた、ま新しい墓。小さい。

約百メートル先の医師団テント所属のオランダ人女医Mは言つた。「昨日は少かつた。死者は五人。一昨日は三十一人。連日平均三十人。幼少児と老人……」

イラク国境から十キロの北方。人類史に灯をともしたあのチグリス大河に流れ入る支流ハブル川ぞい、シロビ近くのイシュクベレン。四月一日からトルコ内に大流入した八十万余といわれるクルド難民のキャンプのひとつ。ここには約八万人。うち七割は幼い者たち。ほとんど全員下痢・脱水症状。はしか蔓延直前。

ざっと数えて一万余の色とりどりのビニール製小型テントは、高度二千メートルから約八キロにわたり急斜緩斜の丘陵を下方まで埋めつくす。低くなるにつれ増える樹木は、いまだ雪と氷だった、流入開始の三月末・四月上旬にかけて、暖をとるため手当り次第に時には根こそぎ、伐られたつくした。なにせ南方イラク国境越えのさいに、難民行を痛めつけたのは最高峯二九〇〇メートルの、雪を頂く連山であった。

「わたしは見た、見た」と、サイドカン（十九歳。イラク北方ドゥク出身）は、「靴が破けてはだしのまま雪道を登る途中、足の凍傷が化膿して激痛に泣き叫び、くずおれた幼児を助ける体力もない母が、地に伏してわびを乞い、子を棄てて逃げるのを。その母もまた、倒れて死んだのを」。そんな話はざらだった。そういう人々を追うのはイラク政府軍の射撃、ナパームすらも使われた虐殺と拉致。

生きのびてここに着いた者は自らの吐瀉物のまじる雪さえも夢中で口にした。下痢も死者も当然で。

政治の綾によって、国際機関の存在は、当時いまだ許容されていなかった。国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の現場チームが正式に入れたのは四月十三日。が、世界に冠たるMSF（国境なき医師団。二十二日現在五十九人）は先がけて入っていた。

女医Mのきょうの仕事は、急激に二十一日に上昇した気温による疫病大発生防止の、地面浄化作業である。手押しポンプに殺菌剤を入れて、この巨大な斜面全域を浄化してゆく。アイルランドの民間団体女性二人も加え、体力ののこる難民にも手伝わせる。

MSFチーフのジミイ（オランダ）は嘆く。「ポンプが全く足りない。殺菌剤が足りない。ア

ビールしてくれ。アンカラで調達出来るのだから。カネがほしい。きょうから十日がヤマ場だ。ワクチンもほしい」「どのくらい?」「十万人分」。UNHCRだけで向う三ヶ月間に三百二十九億円が必要だ。

が、会話はつづけられなくなった。無数の大型、中型ヘリが、すぐ近くの一ヶ所だけ開けた平地に救援物資もろもろを積んで着陸しはじめた轟音のせいだ。

米軍ヘリ。スエーデンやドイツ各民間のヘリ。運ぶのは十人当り二十キロの芋。えんどう豆。防水布大包み等。人々は、とくに子を持つ人々は殺到する。二十日夜行われた(私も傍聴した)救援隊全部参加の作業編成会議では、各血族・村民からリーダーを出し、ヘリ着陸点十五メートルのところに人垣をつくって、殺到する人々を整理し、配給公正とヘリの強風から守るプログラムがつくられた。が、どうして守られよう。着陸寸前のヘリの強風は走りよる子供をなぎ倒す。阻止しようとして走った私も、もろに吹き飛ばされ地に叩きつけられて負傷した。死者も出るのは当りまえ。が――

「有難い、有難い。国際社会が助けてくれる。われわれは見棄てられてはいないのだ」と(珍らしく)英語で話しかけて来たひとりがいた。イラク内ザコオの町で電気技師だったマハメド・ジエマア、三十歳。「芋ばかりの一年であらうと、イラクの恐怖政治の中に帰るより、はるかによい。二度とふたたびイラクになぞ……。国連とイラクの協定? 英米仏による安全地帯設定? 冗談ではない。永劫に守ってくれる保証のない限り、クルド民族と文化存続のためにわたしは決して帰らない!」。急斜面を百メートル五分ばかりのテンポであえぎつつ登って来た水運びのトラック数台もこのころには着きはじめる。管轄はスエーデン。八万人対象一日のみで(医療用こみ)百五十万リットル必要の水の何十分の一かが着いたのだ。人垣がまたゆれる。手に手に持つ

あらゆる容器に水をもらう、他の人々はこのり少い木を必死に伐る、火をおこす、豆が芋が煮られてゆく。水色の煙。

生煮えをむさぼり食べて吐く子、たちまち下痢をする子……。

しかし、ああ。急斜面の頂上のテント約二百人（数ヶ所）にまで、ヘリはゆけない。芋も豆もくすりも。頂上では栄養失調はすでに出ている。降りて来て物をもらって登るにしては弱りすぎている。人の背でロバの背で必要最低限を運ぶだけが関の山。「小さいヘリがほしい、何台でも」「運搬手段がほしい」「いま、すぐ、すぐ」

ではなぜ、そんな高地に人はいる？ 小さい流れがあるから。水が飢えか二者択一。その上に、いまだ政治事情混沌であった流入時、トルコ兵に下から阻まれた経験にもよる。恐怖と不信はぬけないのだ。

加えて、ここから東に四十キロばかり先から向う四、五十キロの斜面難民地は土砂くずれと崖あまたのため、ヘリ着陸もトラックも不可能。辛うじてアメリカのパラシュートが基本必要品を投下しつづけるだけ。難民大群は崖によっていわば封鎖されたまま。必死の救助作戦は^{はた}捗らない。ああ非力！ 天地哭く。

いまだ突貫作業でつくられつつあったカンボジア難民のカオイダン・キャンプと、役立たずのため放置されていた病氣の子供や孤児のマイルート・キャンプを見た。アフガンのキャンプを見た。

スーダン北東からアフリカ南部モザンビーク、レソトまでの難民を見た。